

## 内田魯庵「政治小説を作れよ」の解釈をめぐって

木村有美子

1

社会小説論議が盛んであった明治31年9月、魯庵は「大日本」第3巻6号に「政治小説を作れよ」(署名「内田魯庵」)を発表した。あたかも当時の文壇の動きを鼓舞するようなタイトルを持つこの評論は、翌32年9月、博文館から単行出版された『文芸小品』<sup>(3)</sup>の中にも「政治小説を作るべき好時機」と改題されて収められている。『文芸小品』に収めるに際して、総ルビになっている他、傍点や句読点、或いは一部語句の変更——例えば、△政法▽が△政治▽に、△属僚▽が△俗吏▽にというような若干の変更——はあるが、内容に係わる大幅な改稿は行われていない。<sup>(3)</sup>

さて、この「政治小説を作れよ」は今日どのように受けとめられているのだろうか。煩雑さを省くために、諸氏の見解を大別して

捉えると、いくつかのグループに分類できるかと思う。

一つは、「政治社会にも小説の題材はある。社会に目を向け、政治小説を書けと、政治小説を執筆した評論である」という捉え方をするグループである。ここには、△政治社会にも、小説の好箇の材料があることをしめし、作家をして政治社会にも眼をむける努力をうながしたものの▽だったとする玉井敬之氏、△「個人」の文学から「政治上」の問題を直接描けと要求するものであった▽とする飛鳥井雅道氏、△政治を題材とした小説の必要性を論じている▽とする片岡哲氏、△作家諸君が指を政治小説に染めん事を欲す▽と△現実における諸様相▽を作品化することを呼びかけたとする田中栄一氏<sup>(4)</sup>の説が分類される。更にこのグループには、この評論だけでなく「社会百面相」に至るまでの実作をも含めて、△それまでの日本近代文学がもたなかった社会的追求の意図と試みとを示し▽ている

とする小田切秀雄<sup>(8)</sup>氏の説を含めることができるであらう。

もう一つは、「腐敗した政治社会を材に取れば必然的に滑稽小説、諷刺小説にならざるを得ない」と、政治小説の提唱であることは認めつつも、「滑稽小説の提唱」の方に重点をおいて捉えるグループである。

こちらの方には、政治家の△愚劣と△頹廢をあばく滑稽小説、諷刺小説の制作を説いた▽とする三好行雄氏<sup>(9)</sup>、△政治小説<sup>(10)</sup>のあるべき方法として「滑稽小説」を示唆した▽とする中村完氏<sup>(10)</sup>、△政治界の愚劣、頹廢、悲慘をあばきだす喜劇小説、風刺小説の採用を提案した▽とする西田勝氏<sup>(11)</sup>、「政治小説を作れよ」を△政治家批判小説への要望として収約されていた△へ△社会小説▽の△代表的意見▽だとし、△スイフトを好んだ不知庵としては、とにかく自然な発想▽から△滑稽小説▽を提唱したとする稲垣達郎氏<sup>(12)</sup>、△物質的文明と精神的文明との矛盾する現実▽の△状況に対応するものとして滑稽文学を提唱した△とする佐藤勝氏<sup>(13)</sup>、滑稽な政治界の情勢を△写実するに「滑稽小説」をおいてない▽と主張した論だとする木谷喜美枝氏<sup>(14)</sup>の説を分類することができる。

どこにウェイトをおいているかに多少の差異はあるが、この二つのグループに共通して言えるのは、「政治小説を作れよ」を、「政治小説論」或いは「社会小説論」として受けとめている、という点である。他に、この「政治小説を作れよ」に、魯庵の△「社会小説」を一貫するテーマ▽を見出している猪野謙二氏<sup>(15)</sup>や、「政治小説を作れ

よ」やそれに続く「嚙氷冷語」を△政治小説論▽だと捉える瀬沼茂樹氏<sup>(16)</sup>、△堂々たる長文の政治小説論は彼をもつて嚙矢とする▽と、「政治小説を作れよ」に△政治小説の唱導▽を見る吉田精一氏<sup>(17)</sup>の見解を挙げることも出来、「政治小説を作れよ」が、「政治小説論」或いは「社会小説論」であるという捉え方は一種の定説となりつつあるかの観がある。

が、果してこの評論は、「政治小説論」或いは「社会小説論」と呼べるものなのであろうか。更に具体的に言えば、先にあげた諸氏の見解どおり、「政治小説の執筆」を提唱したもの、「滑稽小説の採用」を促したものであろうか。この筆者の疑問に答えるべく、異論を唱えているのが野村喬氏<sup>(18)</sup>である。氏は「政治小説を作れよ」を、△腐敗せる政治社会を嘲弄する目的をもつて書かれた諷刺評論▽であると捉え、△世上の社会小説論議を真の小説革新に積極的意義を有▽しないものと△揶揄漫罵し、できあがる社会小説は多分往年の政治小説の再生産でしかあるまい▽という魯庵の意図を、△かれ特有のもつてまはった諷刺の辞句において表現した▽ものだと述べている。全くそのとおりであらう。が、その根拠については、△実証すべき材料は山とある。いづれ、それは公開されるだろうが、ここではただ簡単に指摘しておく▽として、魯庵の文壇での経歴と文学観を△詳しく検討することから、魯庵の真意が汲み取られる▽と示唆するにとどめている。

本稿では、筆者なりに従来の捉え方に対する疑問とその根拠を述

べ、野村氏の言う△実証すべき材料△の一端を示すことにしたい。

## 2

まず本論に入る前に、「政治小説を作れよ」の内容について触れておきたい。この評論は十二の段落から成っている。各段落の初めに魯庵自身が●印をつけているので、便宜上、その段落順に番号をつけ、各々の内容を簡単にまとめてみた。尚、第一段落は①、第二段落は②というように表記している。

まず、①では今の政治界が八十数年前に流行した所謂政治小説の蜃気樓的架空譚△を悉く実現し△滑稽の材料△を提供していること、或いは政治家（特に代議士）の墮落していることを例示した後、そのような代議士を中堅とする政党が国政を握っている政治社会は△一大滑稽劇△でしかない指摘し、②では更に政党内閣の現状を分析して、かつて批判していた元老政治を繰返しているにすぎない憲政党内閣と、これを罵る敵派の嫉妬心を△笑止の限り△だとし、この双方を△相倚て漸く立つに等しい△空囊△にたとえ、これを△滑稽の凝塊△だと述べている。③に於ても現在の政治界が配役を代えて楽しむ△ソ、リ狂言△のような△奇現象△、△滑稽△を生じていること、④でも大臣たちが滑稽△小説的材料△を提供していることを指摘しているのである。このように①から④にかけては、政治界が今や△滑稽劇△というべき状態にあること、代議士にしても、内閣の組織にしても、大臣はじめ大官たちの言動にしても、全て△滑稽

劇△の材料を提供していることを述べ、作家にこの△奇現象△を描け、と呼びかけているわけである。

続く⑤⑥では、このような政治界を写實的に描けば△滑稽小説△にならざるを得ないと述べ、△滑稽文字△の欠如を補うため、或いは△日本の物質的文明と精神的文明△の△乖離したる滑稽△を△活現△させるために△政治小説△を執筆せよと説くのである。

しかし、⑦では、現在の政治界、或いは政治家は、かつての△政治小説△の大結構と大人形の世界△に極めて似ており、△従来の政治小説△が最も能く今の政治界を写実している△と皮肉っている。これは①の△所謂政治小説の蜃気樓的架空譚△が悉く実現せられた△という指摘と対応していると考えられる。⑧では具体的に△政治小説△を作る者への△注意△を述べているが、これを要約すれば、社会を批判しないこと、△文壇功名を成す△には△憲政黨頌德的の政治小説△を書くことの二点になる。更に⑨⑩で△栄達の手段△として△政治小説△に作ることを勧め、⑪では△政治小説△を作る際の△秘訣△として、かつての政治小説の方法を踏襲せよと主張しているのである。⑫の結論に当たる部分では、再び△栄達△の手段、或いは△滑稽文学の欠けたるを補ふ意味△で△政治小説△を作れ、とその執筆を促し、△好機は今を逸して何れの時ぞ△と提言して筆を置いている。

このように見ていくと、魯庵は政治界の腐敗ぶりを指摘し、それを写実するために△滑稽小説△という様式を用いて△政治小説△を作れ、△好機△は今だと呼びかけている、とうけとることが出来る。

例えば、⑤では△今の作家諸氏が奮つて政治小説を作つて幸ひに滑稽文字の頗る欠けたるを補はん事を欲す、⑥では△作家諸君が指を政治小説に染めん事を欲す、⑩では△小説家よ、此好機を利して(中略)大々の政治小説を作れよ、⑫では△作家諸氏よ、暫らく神聖なる恋愛の天地を離れて(中略)政治界に遊んで先づ政治小説を作れ、というように、段落の末尾部分に文字どおり、△政治小説△の執筆を促す言葉が繰返されており、これを見る限り、先に挙げた諸氏の見解は至極当然の受けとめ方と言えるのである。

が、注意深く見ていくと、魯庵が△政治小説△の執筆を真剣に提唱したのではないことは、文の端々にあらわれている。

例えば①の中ほどに、△政治小説の価値は姑らく置き△という表現が見える。この言葉に象徴されているとおり、魯庵はこの評論の中で唯の一度も△政治小説の価値△について論じようとはしていないのである。△政治小説△を提唱しようとする者が、その価値を等閑にふしたまま論を進めることができるであらうか。

また、⑤に於て、△政治小説を頻りに唱導するものは多く今の小説家が薄弱なる恋愛の外筆を着けざるを難じて之に替ゆるに拔山翻海の雄大なる趣向を以てせよと云ふ△と述べているが、この表現から、△政治小説を頻りに唱導するもの△の中に自分を含めていない魯庵の意識を垣間見ることが出来る。

更に注意を払うべきは、「政治小説を作れ」と呼びかける直前に、一種の限定がなされている点である。それは⑤の△此意味に於て、⑥⑨の△此点に於て△という但し書きに象徴されており、魯庵が政

治界の滑稽さ、政治家の無能ぶりという一面だけを取り上げ論じていることを端的に示しているのである。これはとりもおさずこの評論が、政治界への諷刺、批判を目的としていることを示唆するものと言えよう。

その他、紙面の関係上割愛せざるを得ないが、この評論には具体例が度々示されている。(特に①④に於て。)それらは皆、政治界の墮落ぶり、滑稽さを指摘するものであり、一篇中に占める分量の多さも、この評論の目的をうかがわせるのである。

が、何よりも、魯庵の意図したところを示しているのは、彼が勧める政治小説の内容である。これを検討すれば、この評論が△政治小説△を提唱しようとしたものでないことは実に明らかなのである。

例えば、魯庵は⑦の末尾で、△従来の政治小説が最も能く政治界を写実したるに感服す△と述べているが、これは逆に言えば、現在の滑稽なる政治界を描写すれば、明治十年代の政治小説の再現になると言うことである。このことは、⑥に示された政治小説を作る際の注意事項、或いは⑩での秘訣を述べた部分が、かつての才子佳人型の政治小説をふまえている(これについては後述する)点からも明らかであるし、もっと端的に、⑧で△学堂先生や東海散士君の慷慨熱憤を学び案を拍いて朗々誦すべし、⑫の末尾——つまり「政治小説を作れよ」一篇の結語にあたる部分で△唯だ学堂大臣君と東海次官君とを学べば即ち成効すべきを思ふ△と、『新日本』「佳人之奇遇」の作者名を挙げている点からもうかがい知ることができる。魯庵が「政治小説を作れ」と呼びかける際に、明治十年代の政治小



説を念頭においていたことは疑いないであろう。

では、魯庵はかつての政治小説を評価していたのだろうか、と言うと全くその逆なのである。

それは、この評論中からも読みとることができる。例えば魯庵は、⑦に於て八文部大臣尾崎行雄君の『新日本』、農商務次官柴四郎君の『佳人之奇遇』、特命全權公使矢野文雄君の『浮城物語』、亡末広重恭君の『雪中梅』の $\vee$ の名をあげた後、 $\wedge$ 當時既に噴々せられしが其名声の高きに比して其理想の狭隘且つ淺膚なるを疑ひしものも亦少なからざりき $\vee$ と評しているのである。そして、唯外見ばかりが大きく人間の運命、性情を捉えていない点を $\wedge$ アンチモイ細工的燦爛妍緻を極めたる大結構と大人形 $\vee$ だと批判しているのである。

この魯庵の態度は「政治小説を作れよ」に於て俄かに表明されたわけではなく、明治二十年代前半の文芸批評中に既に示されているのである。⑦にも名のあがっていた矢野龍溪の『浮城物語』に対する批評はその好例と言える。

魯庵は明治23年5月8日の「国民新聞」に『浮城物語』を読む $\vee$ を発表しているが、その中で、

「浮城物語」は何の為に出でたるや。若し龍溪居士が胸中に鬱積する不平を洩すに過ぎざれば、是れ政治家の玄関番が作りし所謂佳人才子的の政治小説と同様にして審美學上論評するの価値なし。若し徒らに読者を悦ばしむに止まらしめば（中略）

宮本武勇伝と一般にして岳亭以上に置く能はず。  
と述べ、更につけ加えて、

末広鉄腸の「雪中梅」尾崎學堂の「新日本」等の如き、悉くかゝる類にして、畢竟漠然たる立案を設くれば大なりと誤想せしか故なり。（中略）何ぞ審美上々乗となすを得んや。

とも記しているのである。つまり、「政治小説を作れよ」の中で、お手本にせよと名の挙がっていた政治小説は悉く批判、排斥されているわけである。このように魯庵が従来抱いていた文学観をふまえると、 $\wedge$ 審美學上論評するの価値なし $\vee$ と否定した、かつての政治小説の再現を、魯庵が真に望み、その執筆を促したとは到底考えられないのである。

では、「滑稽小説」の提唱の方に重点をおく見解についてはどうであろうか。

先の稲垣氏の指摘にもあったように、魯庵は常々諷刺、滑稽に深い関心を持っており、スウィフト、アヂソンを英國の二大ユーモリストとして捉え、特にスウィフトに関しては「スウィフト論」<sup>(19)</sup>を著し、多くの著作の中でその諷刺力について言及しているのである。

「墮落した政治界をスウィフト流の滑稽小説として描け」と提唱したとしても強ち不自然ではない。

が、ここで注意すべきなのは、この「政治小説を作れよ」の中で魯庵が屢々用いている $\wedge$ 滑稽 $\vee$ の意味と、魯庵が目ざしていたスウィフトやアヂソンの滑稽——つまりユーモアとが全く異質なものであるという点である。

この評論中の $\wedge$ 滑稽 $\vee$ は、⑤に $\wedge$ 撰挙場裡の奮闘激戦は町奴的にして浪六子の材たるべく、議會の大演説は売葉屋の口上のにして南

翠子の材たるべく、とあるように、浪六や南翠の材料となるようなものでしかないのである。魯庵は時俗に阿つた浪六や南翠の作を一向に評価していなかったが、南翠の『唐松操』を批評した文の中で、世間が南翠の作を「諷刺小説」と呼んでいことに對して、へ頗る笑ふべき事にて未だ諷刺小説の定義を知らざるものなり」と述べているのである。これからも魯庵の目ざしていた諷刺、滑稽と、「政治小説を作れよ」の滑稽とが異質なものであることがうかがえるのではないか。

また魯庵は⑧の後で、へ忖れてもユーゴオを学ぶ勿れ、デズレリイを擬る勿れ、デユマすら倣ふ勿れ、況してヤスキフトの如く政治家及び現代社会を罵るに於ては全く無用なり」と述べているが、これが魯庵の本音であつたわけでは勿論ない。諷刺、諷諷を伴わない滑稽は、一九、三馬、鯉丈に代表されるような、表面的なへをどけにすぎない、というのが魯庵本来の主張なのである。

魯庵は「もしや草紙」の批評（明22・1）<sup>(22)</sup>に於て、スウィフトとの比較を行いつつ、「もしや草紙」の滑稽がへ前後矛盾の所為であり、へ性情の一致を犯したへたゞ余に馬鹿馬鹿しへいものであることを指摘し、へ眞の滑稽が単なるへ馬鹿馬鹿しへに終始するものでないことを述べているし、「饗庭簗村氏」（明24・2）<sup>(23)</sup>の中でも、魯庵の目ざしていたへユーモアが、へ可笑を唯一の目的とする茶番狂言類の卑俚猥雑なる方外の脚色へなどではなく、へ極めて眞摯なる筆を以て人間が必ず有する半面の欠陥を描写し以て反省せしむるへ眞面目なる側面へを持つものであることを論じ

ているのである。その他、魯庵は「拈華微笑」評（明23・3）<sup>(24)</sup>の中で、アヂソンのユーモア論を長々と引用している。それは次のようなものである。

アヂソン氏、ユーモアを論じて曰く、「無限の虚偽をもて充ちたる奇怪の妄想はユーモアにあらず、世人がユーモアの上乗なりと信ずる著作を見るに錯雜混亂して自然にも人情にも道理にも外れたるもの也、彼等痴駭の言を吐きてユーモアなりと考へ魯鈍の案を立て、ユーモアなりと喜ぶ、唯馬鹿々々しき文字を並べて凡常の読者を抱腹せしむればユーモリストの名を高からしむべしと大満足す、焉んぞ知らん眞正のユーモアは論理の下に深く隠れ最も立派なる推理力に依て現れ来るものなるを。

（以下略）

魯庵の目ざすユーモアが、右にあげたアヂソンのへ眞正のユーモアと一致すること、決して、「政治小説を作れよ」に示されたへ捧腹絶倒へするようなへ馬鹿々々しへでないことは、ここに繰り返すまでもなからう。つまり、魯庵は「政治小説を作れよ」に於て、眞の意味でのへ滑稽小説の執筆など提唱しているわけではないのである。

以上のように、魯庵のそれまでの文学観と照らしあわせると、魯庵が眞面目に明治十年代の「政治小説」の再来を望んだのでも、所謂へをどけにすぎないへ滑稽小説の執筆を促したのでもないことは明らかである。では、こうした逆説的な方法を通して魯庵が訴えようとしたものは何であつたのか。スウィフトがへ一読看過すれ

ば兎園の冊子にすぎない作品の裏面に、僧正や大臣を戦慄させる  
 △嘲弄の意△を秘めたように、やはり魯庵の目的も、へ馬鹿々々し  
 さ△に終始する腐敗した政治界、政治家たちへの痛罵、批判にあつ  
 たと捉えるべきではなからうか。

## 3

では次に、右のように考える根拠をまた違った視点から——具体  
 的に言えば、魯庵が明治27年4月に匿名を用いて単行出版した『文  
 学者となる法』<sup>(28)</sup>との比較の上から論じてみたいと思う。

前述の、「政治小説を作れよ」を「政治小説」或いは「滑稽小説」  
 の提唱と捉えていた諸氏のうち、次の五氏が『文学者となる法』に  
 ついても論及している。まず、その見解から紹介してみよう。

小田切秀雄氏は、<sup>(29)</sup>「当時の文壇、——文学者自ら文学を游戲視し  
 ていた戯作的文学の一切の現象とその意味、そのバカバカしさを念  
 入りに次々と照らし出しつつ、文学者たるためにはかく努めるべし  
 という逆説的方法によって叙述を展開△している」と述べ、このよう  
 な△書き方のなかに露頭している魯庵のはげしい侮蔑と嘲笑とに△  
 『文学者となる法』全体が支えられていることは、(中略)硯友社  
 文学とその戯作的な文学意識とにたいする完膚なきまでの批判とな  
 っている△と評している。つまり、この書を△当時の硯友社支配下  
 の文壇を諷刺し去ったもの△であると受けとめているのである。同

様に瀬沼茂樹氏は『文学者となる法』を△硯友社を中心とする当時  
 の文壇を揶揄し、諷刺し、批判△したものだ」と捉えているし、猪野  
 謙二氏は△硯友社中心の文壇に対する辛辣な諷刺の書△であると言  
 う。また吉田精一氏は△当時の文壇の表裏を委曲をつくして写し出  
 すとともに、江戸前の諧謔と嘲罵をふんだんに駆使して、当時の作  
 家の軽薄な素養や、衣食住の何かににつけてとかく「ぶり」たがる生  
 活態度をこき下ろした。とりわけ文壇の中心をなしていた硯友社に  
 もつとも毒を浴びせている。△と述べ、△日清戦争前の文壇を揶揄し  
 た奇文学△〈明治文学史上の珍書の一つ△に数えているのである。  
 稲垣達郎氏も△当代明治文壇にうかがえる頹廃を戯画化し、とりわ  
 け硯友社派を激しく「快罵」したものの△と捉えている。  
 このように、いずれも「硯友社の支配下にあった文壇を辛辣に諷  
 刺批判した書」だと受けとめているわけであるが、この見解は右の  
 五氏にとどまらず、筆者を含め多くの研究者が支持するところであ  
 る。

ところが、この諷刺批判の書と言われる『文学者となる法』と、  
 全く性質を異にするはずである「政治小説を作れよ」とは、その表  
 現や発想に於て極めて似通った点を持っているのである。以下、こ  
 の類似点について論じることにする。

まず第一に挙げられるのは、「政治小説を作れよ」に於ける△○  
 ○君△という表記の頻度の高さである。例えば△では、現在の△政  
 治家を見るに小デスレイイ君はあり小マキアベリイ君はあり小ロベ  
 スピール君はあり△というように△小○○君△という表現が並べら

れているし、⑦ではかつての政治小説の登場人物と、当世の△大臣君、次官君、勅参君、局長君（以下略）△とが非常に似通っている、という記述があり、△○○君△の多用が目につくのである。例示は省くが⑧にも△○○君△という表記は十一回に亘って見出せる。また、かつての政治小説の作者であり、現在に於ても大臣や次官として政治に携わっている人物について、⑦では△文部大臣尾崎行雄君・農商務次官柴四郎君、特命全權公使矢野文雄君、⑧では△学堂先生・東海散士君、⑨では△学堂大臣君と東海次官君△というように、官職名と筆名を混用した上で△君△を付し、政治小説者として更に政治家として二重の意味での揶揄を加えているのである。これは、『文学者となる法』で、文学者を△○○大君△△○○大△先生△△○○作者様△と呼んでからかったのと同様の手法と言えるであろう。

その他、表現の類似を指摘すれば、「政治小説を作れよ」の⑨の次の部分、

政治小説なる哉、政治小説なる哉、必ず成功を保証すべきは政治小説なる哉。独り文事の功勞をもて榮譽ある閑職を買得るのみならず人材の拔擢が撰挙地方にすら信認なき大骨の政治家に及べるを見て今の小説家諸子の学才力量猶ほ優に勅任相当官たるべき權利あるを思ふ。

と、『文学者となる法』の、

文学者なる哉、文学者なる哉。天変地異を笑つて済ますものは文学者なり。社会人事を茶にして仕舞ふ者は文学者なり。否な、神

の特別な最負を受けて自然に hypnotize するものは文学者なり。文学者なる哉、文学者なる哉。（中略）  
忽て世間一切の善男子、若し遊んで暮すが御執心ならば、直ちにお宗旨を変へて文学者となれ。

の部分とは一読明瞭なように非常に似通っているのである。

些細な表現の類似を挙げればきりが無いが、一例を示すとすれば、政治小説を作れよ」の⑩の

政治界今や活潑々地となりて憲政党が滔天の勢は鯨寄る宗谷の岬よりマラリヤ流行る台湾の土まで漲りて（中略）憲政黨員の肩書を重しとするに到りぬ。

と、『文学者となる法』の

太平の御代にては小説家即ち文学者の数次第々々に増加し、鯛は花は見ぬ里もあれど、鯨寄る北海の浜辺、薯蕷堀る九州の山奥に到るまで石版画と赤本は見ざるの地なしと鼻うごめかして文学の功德無量大なるを説く当世男殆んど門並なり。

を挙げることができる。ともに△憲政黨員△や△文学者△の勢力を指摘した表現であるが、類似点の多い文章と言えよう。

こうした表現上の類似は表面的な問題にとどまらず、共通した意識から生み出されていることが多いものである。「政治小説を作れよ」と『文学者となる法』の場合、論の発想そのものが極めて近いように思われる。

これを端的に示しているのは、「政治小説を作れよ」の⑧と、『文学者となる法』一篇の構造に於ける類似である。魯庵は⑧で△政治

小説▽を作る際の注意事項を述べているが、これを簡単にまとめれば次のようになる。

- (1) 大政治家の政治小説を読んで、政治家特有の理想、希望、趣味を精かにすること。
- (2) 政治家の実態、消息を観察すること。
- (3) 政治小説の実作方法：かつての政治小説の登場人物たちを配し、艱難と艷福とを盛り保案條例に初まり政党内閣に終わる大々脚色を立案すること。注意点：決してユーゴオ、ヂスレリイ、デユマ、況してやスキフトのように政治家、現代社会を罵らないこと。
- (4) 学堂、東海散士を学び、憲政党頌徳的政治小説を作ることが文壇功名を成すコツであること。

では次に、『文学者となる法』一篇の構造について見てみよう。

『文学者となる法』はそもそも文学者となるための方法、注意事項を述べるという形で文壇を批判しているのであるが、その構成は、

- (1) 文学界の動静を掴むため、大家の名を覚えること。
- (2) 文学者の言動を観察して、その嗜好見識を学ぶこと。
- (3) 実作に於ける注意点と方法。
- (4) 時流にあった作品を出版するコツ。

というようにまとめることができ、殆ど「政治小説を作れよ」の⑧と、発想に於て変わりないことがわかるのである。また、⑧(3)では、政治家や現代社会を罵らないことが「注意点▽」として挙げられているが、『文学者となる法』に於ても、へ出世の蔓▽を失わない

ためにへ文学者を罵るは無用なり▽と同様の指摘が為されているのである。

更に、「政治小説を作れよ」の⑩で、魯庵は、へ成功すべき政治小説▽のへ秘訣▽として、へ艷福艷禍に富める才子▽をへ憲政党に属する政治家▽とし、へ其言語動作を少しく政治的臭味あらし▽めればよい、唯注意すべきは、主人公を失態させないこと、へ憂国の大丈夫との恋愛を成功▽させ、へ国務大臣たらしむ▽ることであると述べているが、これも『文学者となる法』で魯庵が挙げたへ恋愛小説▽へ張扇小説▽の書き方の手本と、その発想に於て何ら変わるところはないのである。魯庵はへ恋愛小説▽の手本として紅葉をはじめとする硯友社文学を、へ張扇小説▽の手本として当時もてはやされていた浪六の作品を念頭においていたのであろうが、書き方の手本を示すという形で、そのワンパターンぶりを痛烈に諷刺しているのである。「政治小説を作れよ」の⑧や⑩で示されたへ政治小説▽を作る際の注意事項や秘訣が、学堂、東海散士、龍溪等に代表される明治十年代の政治小説をふまえていることは繰返すまでもないが、やはりここでもその外形ばかりが大きく、登場人物、話の進め方に全く個性の見られない政治小説のあり方を諷刺したと見るべきであろう。

以上述べたように、表現、発想の方法に於て、「政治小説を作れよ」は『文学者となる法』の延長線上にあると言える。『文学者となる法』が読者に文学者となることを勧めた書ではなく、硯友社を中心とする文壇批判を目的としていたのと同様に、この「政治小説

を作れよ」の目的も、墮落した政治界、政治家を諷刺、批判するところにあつた、と考えるべきではないか。

先に挙げた五氏は、同様の表現、発想から成る二つの文を、一方は文壇批判の書と見、一方は政治小説の提唱と捉えているわけである。魯庵のシニカルな批評のあり方、諷刺の効果を認めていた各氏が、なぜ「政治小説を作れよ」に対してだけは、魯庵の表面的な呼びかけをかくも正直に受けとめてしまったのであろうか。それは恐らく、この評論が発表された当時盛んであつた社会小説論議の潮流の中に「政治小説を作れよ」を位置づけようとする先入観が働いていたからではないか。文学史的に捉えようとするあまり、魯庵が逆接的表現の中にこめた政治界への諷刺の意図を看過する結果に陥つたのであろう。問題は右の五氏にとどまらない。冒頭に示したとおり、多くの研究者がこの評論を政治小説、或いは社会小説の提唱と捉えた、その背景には、社会小説論議との関連が意識されていたのではないかと思われる。

社会小説論議の最中に、政治小説の執筆を促すかのようなタイトルの評論を発表したことが、今日の誤読の元凶となつたには違いないが、むしろここに文明批評家を自負した魯庵の面目を見る気がする。文壇がブームとも言える社会小説論議に沸きたつ中で、魯庵は、新文学を生み出せそうにもない論議に加わることも、逆にこの気運を利用して、当時の政治そのものを批判するタイムリーな評論を発表する方を選んだのである。しかも、一見ブームに加わるのかのようなポーズをとりながら――。表現は勿論のこと、発表時期やタ

イトルの選択にも、魯庵独特のシニカルな諷刺精神が発揮されたものとみるべきであらう。

4

最後にもう一点付け加えておかねばならないのは、「政治小説を作れよ」の後に発表された評論との関連についてである。最初に示した諸氏の中にも瀬沼氏や木谷氏のように、「朝茶の子」(明32・5<sup>(31)</sup>)や「嚙氷冷語」(明32・9<sup>(32)</sup>)に「政治小説を作れよ」と重なる発言を見出し、両者を同一レベルの社会小説論だと捉える方もあるのである。

確かに両者には共通する発言も見られる。例えば「朝茶の子」では八文壇の疲弊墮落を救ふ策Vの一つとして八政治宗教等社会及び国家の問題を研究することVを挙げているし、今の文士が八社会の活問題を対岸の火災視するV点を批判し、八進んで社会の活問題を討尋し(中略)解釈するを以て自家の責任となさざるべからずVと述べているのである。同様に「嚙氷冷語」でも、八機会の投すべきあらば傍ら活動社会に加はりて其実情を審かにし其材料を饒かにし以て今の単調なる恋愛小説を複雑なる社会小説たらしむるは即ち文壇の革新であるVと記している。つまり魯庵は社会に目を向けるよう作家に呼びかけていたのであって、これが「政治小説を作れよ」の冒頭部分の八恋愛世界に注ぐ觀察を一転して政治界にむけよV、或いはこの評論中繰返された八政治小説を作れVという発言と重なる

りあうと言っているのである。

ここで筆者が疑問に思ふのは、なぜ「朝茶の子」や「嚼水冷語」だけを問題にして、「政治小説を作れよ」以前の魯庵の発言を無視するのか、という点である。というのは、社会小説論議が盛んになる以前から、魯庵は文学と社会との関係について度々発言しているからである。

「小説史稿を読む」(明23・5)<sup>(33)</sup>という批評中、△改竄を要する欠点▽として第一に△小説と社会との関係を説かざりし事▽を挙げているし、「饗庭篁村氏」(明24・2・5)でも、△従来我国の詩文人は大抵自己の小世界に住して自然の風色を愛する外は毫も社会的の観念を蓄へざりき。(中略)人事を咏ずる小説家も材を求むる処此社会を外にして何処ぞや▽と、△活ける社会▽△人事の観察▽の必要性を説いているのである。また、「現代文学」(明24・11・明25・1)<sup>(34)</sup>に於ては、社会人事に全く無関心な文筆家の多い中で、△社会に対する冷罵を吐▽いた成島柳北を評価する発言をしているし、『文学一斑』(明25・3)<sup>(35)</sup>では、△社会の氣運を考ふるに遷り行く世と伴ふべき詩はなどか旧日の観に止まるべき▽、或いは△詩想は社会と共に變ずれば、旧日の詩想を標準となして今後の詩を判ずべからず。月花時代は既に去りて今や來らむとする詩は人生に属する一現象を以て題目とせざるべからず▽と述べている。更に△詩▽について、△最も進歩したる詩は人間の運命を示し社会と人性の關係を明らかにするものなり▽と規定している。△社会小説▽という項を設けて論じているのも注目すべき点であろう。その他、「今日

の小説及び小説家」(明26・7)<sup>(36)</sup>では、△小説家は世俗を導き嗜好を長ぞむるのは任あり▽、社会の△師表に立つの志を忘るべからず▽と述べ、今の小説家が△社会の実相を主観的に描写し以て人生の運命を説示する底の妙処▽に盲目であることを批判しているのである。同様の指摘は「再び今日の小説家を論ず」(明26・9)<sup>(37)</sup>でも繰返され、小説家を△人生の探究者▽△社会の批判者▽であるとし、△社会に立てる活ける模範たらざるべからず▽と述べているのである。

このように、風流を氣取つて社会的視野を持つとうとしない小説家への批判、社会を見という主張は表現を変えながらも反覆されているのである。小説家を△社会の師表に立つべきもの▽とする把握も明治22年の夏にドストエフスキーの文学と出會つて以来、魯庵が一貫して持ち続けた文学観であつたと言えるのである。

明治29年10月の「社会小説出版予告」<sup>(38)</sup>に端を発した社会小説論議の真只中に発表されたというだけで、「政治小説を作れよ」はいかにも社会小説論と関連があるらしく解釈されて來たが、決してそうではない。野村喬氏は、魯庵は社会小説論議には△全く動かされなかつた▽という見解を示しているが、△全く▽と言えないまでも、こうした氣運の生じる以前から自己の文学観として既に社会と文学との關係の重要性を自覺していたことは確かであろう。<sup>(39)</sup>「政治小説を作れよ」の直後に発表された評論のみを取り上げ、その社会小説的な要素を「政治小説を作れよ」の解釈に応用し、あたかも氣運に乗じた一連の評論であるかのような捉え方に対して、疑問を感じず

にはいられないのである。

5

以上、魯庵の文学観を照らしあわせて、或いは『文学者となる法』との類似の点から、「政治小説を作れよ」が、△政治小説▽△滑稽小説▽の執筆を提唱したものではなく、政治界、政治家への諷刺、批判を目的とするものであったことを述べて来たが、この評論については更に考えなくてはならない問題が残されている。

既に紙面を使い果たしてしまつたので指摘するに留めるが、それは『暮の廿八日』や『社会百面相』<sup>(3)</sup>の解釈との関連である。

例えば、猪野謙二氏は、△社会小説の提唱と創作の両面において、もっとも注目さるべき業績を残したのが内田魯庵であつた▽と述べ、△社会小説(もしくは新しい政治小説)の提唱者としてのかれの評論中で注目さるべきもの▽として、「政治小説を作れよ」と「嚆氷冷語」を、創作面の代表作として『暮の廿八日』と『社会百面相』を挙げているのである。<sup>(4)</sup>猪野氏と同様、魯庵が社会小説の理論的提唱と実作との両方を手がけたと捉えている研究者は多く、意識的にも無意識的にも、『暮の廿八日』や『社会百面相』といった魯庵の創作の理論的背景を、「政治小説を作れよ」等の評論の中に求めているのである。換言すれば、社会小説提唱の評論を魯庵が発表しているという固定観念の下に、前後して出版された創作ものが読まれてしまう懸念がある、ということである。特に、『暮の廿八日』の場

合、社会小説の先駆として多くの文学史に位置づけられ、魯庵の代表作として広く認められている。が、果して『暮の廿八日』は社会小説と言えるものなのであろうか。筆者は内容的にみてもこの作品を社会小説とは捉えていないが、もし、社会小説だとする論拠の一つに「政治小説を作れよ」に於ける△社会小説の提唱▽が数えられているとすれば、小説の解釈自体が揺らぐことになりはしまいか。「政治小説を作れよ」で魯庵は社会小説(政治小説)の執筆など一度も提唱してはいないからである。そう考えると一評論の解釈に留まらない重要な問題を含んでいるといえる。「政治小説を作れよ」に於ける魯庵の意図を再確認する必要がある所以である。

#### 注 記

- (1) 煩雑さを省くため、雑誌等の発行年月日、巻号数には算用数字を用いた。
- (2) 署名は本文冒頭では「不知庵」、奥書では「内田貢」となっている。
- (3) 以下取り上げる諸論文中に於ても、「政治小説を作れよ」と「政治小説を作るべき好時機」の二つのタイトルが混在したが、同一内容の評論に対する所見として扱った。
- (4) 「内田魯庵論」(『日本文学』昭30・5)



- (5) 「社会小説の発展—明治三十年代社会小説(二)—」『文学』  
昭34・9)
- (6) 「内田魯庵の社会小説」(「青山語文」昭53・3)
- (7) 「願望の文学—内田魯庵の小説世界の意味について—」  
(「新潟大学国文学会誌」昭54・1)
- 但し、田中氏の場合、魯庵の三十年代の小説を「政治小説を作れよ」等の主張の上に立った実践✓作としながらも、それがへいわゆる「政治小説」「社会小説」と称される性格のものであったかどうか✓に疑問を呈している点で、ここに挙げた諸氏の見解とは異なっている。
- (8) 『日本近代文学』青木書店 昭30・6
- (9) 『日本文学史』12 岩波書店 昭33・9
- (10) 「内田魯庵」(「解釈と鑑賞」昭35・10)
- (11) 『講座日本文学史』大月書店 昭36・3
- (12) 『近代文学評論大系』2 角川書店 昭47・6
- (13) 注記⑫参照
- (14) 『近代文学』2 有斐閣双書 昭52・9
- (15) 『近代日本文学史研究』未来社 昭29・1
- (16) 『日本現代文学全集』8 講談社 昭42・11
- (17) 「評論の系譜45 内田不知庵」(「解釈と鑑賞」昭46・3)、  
後、『近代文芸評論史 明治篇』至文堂 昭50・2に収録。
- (18) 「時代精神と社会小説の論」(「国文学」昭36・12)
- 『「くれの廿八日」性格考』(「日本の近代文学—作家と作品—」

- 角川書店 昭53・11)
- (19) 「女学雑誌」160号 明22・5 署名 藤の屋主人
- (20) 「三日月」(「国民之友」133号 明24・10) 署名 無、無、無、  
「今日の小説及び小説家」(「国民之友」195号 明26・7)  
署名 不知庵主人
- (21) 「南翠外史の『唐松操』」(「女学雑誌」172・173号 明22・7・  
8) 署名 南仙子
- (22) 「もしや草紙に就て」(「女学雑誌」143・146号) 署名 不知庵主人
- (23) 「国民之友」110・113・115・117・119号 署名 不知庵主人  
後、『文芸小品』に収録。
- (24) 「紅葉山人の『拈華微笑』」(「国民新聞」明23・3・13) 署名  
不知庵主人
- (25) 右文社 署名 三文字屋金平
- (26) 『近代日本の作家たち』厚文社 昭29・4
- (27) 注記⑩参照
- (28) 『現代日本文学大系』3 筑摩書房 昭45・11
- (29) 注記⑪参照
- (30) 『明治文学全集』24 筑摩書房 昭53・3
- (31) 「新小説」4年6・8号 署名 魯庵生
- (32) 『文芸小品』所収。初出は「文壇炒豆」(「太陽」5巻17号  
明32・8) 署名 魯庵生
- (33) 「出版月評」32号 署名 F.C.A.

- (34) 「国民之友」137・138・140・141号 署名 不知庵主人  
 (35) 博文館 署名 内田 貢、表紙には不知庵主人とある。  
 (36) 注記(9)参照  
 (37) 「国民之友」202号 署名 不知庵  
 (38) 「国民之友」320号  
 (39) 「近代文学史認識の留意点(下)」(「文学」昭39・9)  
 (40) 田中栄一氏も前掲論文(注記(7)参照)に於て、八魯庵の主張の  
 基盤Vに八「社会小説」論におけるごとき諸要素はすでに包含  
 されて在ったVと指摘している。  
 (41) 『新著月刊』2巻4号 明31・3 署名 魚日庵魯生  
 (42) 博文館 明35・6(明33・34に執筆、「太平洋」「太陽」等に発  
 表された諸作をまとめ単行出版したもの)  
 (43) 『社会百面相』下巻 岩波文庫 昭29・9  
 (44) これについては拙稿『くれの廿八日』考(一)——本文の読解を  
 中心に——(「樟蔭国文学」昭62・3)で詳しく論じている。